

自然主義的功利主義と幸福の測定

鈴木 真

功利主義は様々な批判にさらされながらも、一つの代表的な倫理学理論として重要視されてきた。その理由の一つは、幸福（と不幸）というほとんどの人が重要だと思い、しかも自然界に存在すると思われるものに根拠を置き、そのわりと単純で直観的な関数として正・不正を定めていることにあるとあってよい。つまり、皆が納得する客観的な根拠に基づいて正・不正を決定し、人々の道徳的意思決定の問題や道徳的意見対立の問題を解決したいという、よく理解できる倫理的な関心と、道徳の問題を原理的に検証可能な事実の問題に還元して説明したいという自然主義的動機からすれば、功利主義は非常に魅力的な立場なのである。近年は狭義の功利主義を放棄して幸福以外の引数（たとえば分配の平等性や応報）を入れ、関数を多変数にしようという方向性も有力で、私もそれに魅力を感じる（鈴木2011）。しかしこの路線をとれば、上記の倫理的な関心と自然主義的動機が満たされるかどうかは明らかではない。

しかし、そもそも幸福（と不幸）—福利（well-being）、利益、効用などと呼ばれることもある—は功利主義において期待される役割を果たせるのだろうか。最も典型的な功利主義の形態である総量最大化功利主義は、全関係者の利益の総量を最大化する行為をなすべきだが、この主張には利益が比率尺度で測れ⁽¹⁾、個人間で比較できるという前提がある。こうした前提が満たされる見込みがどれだけあるのか、ということは、倫理学においても経済学においても重要な問とみなされてきた。この問いに対する答えが否定的であるなら、幸福は期待される役割を果たせず、功利主義はその典型的な形態では成り立たないだろう。

以下では、代表的な功利主義理論の幸福の測定に関する前提を確認したあとで、こうした前提に関する懸念を検討する。懸念の一つの源泉であった認識論の問題は、測定の実際的な問題は喚起しても原理的な測定の可能性を排除しない。現在の幸福概念の不確定性は、原理的な測定可能性を脅かす。これは一定程度規約的な定義をしたりして概念を明確化すれば回避できる部分もあるが、そうした定義は恣意的だという批判を受けざるをえない。規範理論としての功利主義にある、幸福は善である（し、不幸もあるとすれば、それは悪である）という想定を満

(1) 功利主義には間隔尺度で十分だとみなしている論者もいるが（e.g. Roemer (1996), Chapter 1）、次節でみるように、これは実際には平均型では成り立つが総量型では成り立たない。

たすように定義しようとするれば、恣意性が緩和される側面もあるが、完全になくなりはないだろう。また、あまりこれまで明示的に問題にされてはこなかったが、幸福は善だ、という想定は、功利主義者が善に課す要請を前提すれば、他の側面ではかなり要求がきついという懸念もある。この想定がなければ、幸福が増えると事態が悪くなるといったことが起こっても問題がないから、世界の中から測定可能な「幸福」を選ぶのには苦勞しないかもしれない。しかしこの想定があるために、幸福の候補のリストは狭まってしまう、功利主義の比較可能性に関する前提を満たすようなものを選べるという可能性が低くなってしまいうのである。結論としては、典型的な功利主義の幸福に対する要請はおそらく強すぎるので、そうした要請を弱めつつ、幸福概念を世界の中にあるものをはっきりと指示できるように改変することが望ましい、と論じる。結果として、Broome (2004, esp. 260) のように、(誰かにとっての) 善の条件をアプリアリに確定しておいて、それからその条件を満たすものを世界の中から探す、というアプリアリな理論化を先行させるアプローチに反対する。

なお、本稿で検討するのは、幸福自体の測定であって、幸福の原因・結果や幸福の指標とされるものの測定ではない。たとえば、お金の量は測れるが、それは幸福の指標ではあるかもしれないが幸福自体ではないので、本稿の議論とは関連しない⁽²⁾。

1. 功利主義による幸福の測定・比較可能性の想定

ここでは功利主義による幸福の比較可能性の想定をみておく。まず、総量功利主義と平均功利主義という代表的な形態をみておこう。総量功利主義は関係者の福利の総量、すなわち以下の量によって道徳的な正・不正が決定されるとする。

$$g^g = \sum_{p \in \Pi} \sum_{t \in \Lambda^p} g_t^p$$

g_t^p : 各関係者 p の各時点 t における福利

Λ^p : p の生を構成する時間の集合

Π : 母集団

前提として、福利の量に関して各人内・各人間（そして各時点間）における足し算ができる、量の絶対値に意味があるということがある。これが成り立つかどうかの問題となる。

平均功利主義は関係者の福利の平均がより大きい方を選ぶべきだとする立場である。すなわ

(2) もちろん、幸福をお金を引数とする関数として定義でき、その関数が把握できるならば、幸福自体の測定もお金の測定を通じて可能である。しかしそのような関数が存在するとしても、それがお金のほかにどのような引数をとるのか、その関数はどのように定式化できるのか、そもそもそのような関数はどのようにしたら発見できるのか、といったことがわからなければ、お金の測定は幸福の測定にはつながらない。

ち、以下の量によって道徳的な正・不正が決定されるとする。

$$g^m = \frac{1}{n} \sum_{p \in \Pi} \sum_{t \in A^p} g_t^p$$

n：母集団に属する関係者の頭数

これらの功利主義が幸福の測定可能性について前提していることをもう少し詳しくみておこう。

(1) 個人間比較について⁽³⁾

上記の定式からもみてとれるように、功利主義は一般に福利の個人間比較の可能性を前提している。何らかの個人間比較ができなければ、個人間の福利のトレードオフができないので、誰かの福利を上げるには別の誰かの福利を下げなければならない状況において、(福利に関して)状況を比較評価することができない。道徳が重要だと思われるまさにそのような状況で功利主義が何も言えないなら、それは道徳理論としての役割を果たしていないと考えられる。だから、福利の個人間比較の可能性はどのような型の功利主義にも必要だとみなされている。しかし、経済学においては福利の個人間比較は不可能だという主張が根強い(この点と上記の点については、たとえばBrennan 2007, 131を参照)。

(2) 一般的な尺度のタイプに関して

次に功利主義が要請する幸福の尺度について考えてみよう。非常に大ざっぱに言うと、測定とは測られる対象にある質的關係を数で表すことだと考えられる。Stevens (1957)に従った、一般的な尺度のタイプの分類では、尺度のタイプは測定において許容できる変換によって、強いものから順に、絶対尺度、比率尺度、間隔尺度、順序尺度、名義尺度に分類される。数え上げのように、対象が一通りにしか測定できない場合は絶対尺度、複数の仕方では測定できるが、物質の長さや質量や時間のように、相互に正の相似変換⁽⁴⁾できる仕方ではないと測定できない場合は比率尺度、摂氏や華氏で測られる温度のように、相互に正の線形変換⁽⁵⁾できる仕方ではないと測定できない場合は間隔尺度、鉱物のモース硬度のように、相互に狭義単調増加変換⁽⁶⁾できる仕方ではないと測定できない場合は順序尺度、学生番号のように、いかなる一対一対応であってもよい場合は名義尺度と呼ばれる (Roberts 1985, 64f)。間隔尺度以上の尺度がいわゆる基数

(3) ここでいう「個人」の集合は、人間以外の幸福を享受しうる存在(たとえば、脊椎動物)も含む。

(4) $\psi(x) = \alpha x$, $\alpha > 0$

(5) $\psi(x) = \alpha x + \beta$, $\alpha > 0$

(6) $x \geq y$ なのは $\psi(x) \geq \psi(y)$ の場合、そしてその場合に限る

尺度である。より強い尺度はより多くの情報を含む。絶対尺度や比率尺度では数値の比にも差にも順序にも意味があるが、間隔尺度では数値の差と順序にしか意味がなく、順序尺度では順序にしか意味がない。たとえば、42.195キロメートルの長さのマラソンコースは1キロのトラックの42.195倍長いといえるが、摂氏42度は摂氏1度の42倍の温度であるとはいえない。また摂氏15度と摂氏14度の差と摂氏14度と摂氏13度の差は同じだといえるが、モース硬度10のダイヤモンドとモース硬度9のコランダムとの差とコランダムとモース硬度8のトパースの差が同じだとはいえない。

総量功利主義は福利が比率尺度で測れることを要求する。別の代表的な形態の功利主義である平均功利主義は、福利が間隔尺度で測れることだけを要求する (Arrhenius, forthcoming)。この点を例示してみよう。

二つの可能な帰結AとBがあるとし、各帰結における各人の福利 W_i の状態を表す仕方の一つは以下のようなとする(帰結Aにはいない人が帰結Bには1人(つまり、5番が)存在する)。

	W1	W2	W3	W4	W5
A	10	20	30	40	
B	20	20	20	20	20

この表に従えば、総量型ではAとBともに福利の総量は100なのでどちらでもよいことになり、平均型ではAの平均は25、Bの平均は20なので、Aの方が善いことになる。しかし、福利が(個人間比較は許すが)間隔尺度でしか測れないとすると、正の線形変換まで許容されてしまうので、たとえば上の表を $f(x) = 2x + 10$ で変換すると以下のようになる。

	W1	W2	W3	W4	W5
A	30	50	70	90	
B	50	50	50	50	50

この表に従えば、総量型ではAの福利の総量は240、Bの福利の総量は250なのでBの方が善いことになってしまう。つまり、福利の恣意的な表し方の差によって評価が異なることになるということになる。だから、総量型功利主義は間隔尺度でしか福利が測れないなら意味をなさない。しかし、福利の平均をみると、Aは60、Bは50であり、上の表の評価をしているときと同じ評価—Aの方が善い—が得られる。一般的に、平均功利主義は間隔尺度で許される変換の下で一貫した評価を下す。この意味で、平均功利主義は間隔尺度までしか要求しないが、総量功利主義は比率尺度を前提する。

(3) ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの三分と純利益について

福利の哲学的理論は、多くの場合、絶対的な意味で福利がポジティブ、ネガティブ、ニュートラルに分けられることを想定する。絶対的というのは、現状 (status quo) と認識されるものからの相対的利得や相対的損失ではないということである。たとえば、福利の快樂説によれば、快は当事者にとって善いもの (ポジティブ、利益) で、苦は当事者にとって悪いもの (ネガティブ、不利益) で、それ以外のものは当事者にとって善でも悪でもない (ニュートラル)。ポジティブな福利とネガティブな福利を認める説は、その関数として純利益が定義できることも主張する。典型的には、Benthamが考えたように、ポジティブな福利を正の数、ネガティブな福利を負の数で表し、純利益はその和とみなすが、他の可能性もありうる。この区分を受け入れたうえで功利主義を展開するなら、先の「 g^p : 各関係者 p の福利」というのは、純利益を表すことになる。

なお、この三分はよくみられるものだが、功利主義にとって必須ではない。日常的な直観からは離れるかもしれないが、この三分を受け入れない立場もありうる。実際、経済学や生の質 (Quality of Life)・質調整生存年 (QALY) の理論 (e.g. 池上ほか2001) ではこの絶対的な区分はなされないことが多い。

(4) スカラーとベクター

功利主義は通常福利をスカラー量で表す。ある種の福利の理論では、福利の構成要素⁽⁷⁾ が色々なタイプのもので構成されていて、統一的な尺度にのらないために、福利はベクターで表現される (たとえば、ある種の客観リスト説、Sen 1985やNussbaum 2000のケイパビリティ・アプローチ)。これだと、福利の各要素間のトレードオフができない。Elster and Roemer(1991, 9)はこのためにRawls 1971の基本財の理論に個人間比較の問題があることを指摘しているが、実のところこの問題は、二つのタイプの福利の構成要素を同一人の生において比較する際にも起こる。

2. 幸福：主観説と客観説

幸福は何らかの仕方で当事者の心的状態に依存すると考えられることが多い。これは、幸福の源は人それぞれであるという直観や、(規範的な意味における) 幸福は各人にとって重要な

(7) この論考では、幸福ないし福利の概念を2種類に分ける。一つは「全体的福利」で、これはある存在にとっての生の善さ(または悪さ)を意味する。もう一つは「構成要素としての福利」で、これはその存在の生を善くする(あるいは悪くする)事態を意味する。

ものであるという想定を説明するには、幸福を主観に何らかの仕方で依存させることが有望にみえるからだろう。しかし、幸福を心に依存しないものとみなす説も根強く、しかもその理論的動機の一つは測定の困難を緩和するのではないかという期待である。以下では、主として主観説をとった場合を考えて、そのあと客観説にとっての測定の問題を簡潔に考察する。

3. 幸福の測定の問題と主観的な幸福についての二大測定アプローチ

一見、幸福の測定の問題は二つに分けられるように見える。

(1) 幸福の測定の原理的・形而上学的問題：幸福が、そもそも数で表されるような関係にたつかどうか

これは、幸福が一定の公理を満足するかどうかによる。たとえば、物理的長さは比率尺度で測るための必要十分条件を満たすが、濃度（たとえば、水中の塩分濃度）は満たさない。たとえば、1%の塩分濃度の水1リットルと2%の塩分濃度の水1リットルを合わせても、3%の塩分濃度の水2リットルにはならず、加法性が成り立たない。幸福は物理的長さのようなもので、比率尺度の必要十分条件となる公理を満たすだろうか。

(2) 幸福の測定の認識論的問題：幸福が、観察と科学的方法に基づいて現実に測定可能かどうか

この問いの答えは、どんな観察と科学的方法が可能で信頼性・妥当性が高いかということによる。幸福が数で表されるような関係にたつとしても、それは現実に測定可能かどうかというのは別のことにみえる。たとえば、幸福が心的なら、たとえそれが量的であったとしても、第三者的な観察によって（個人間比較できる仕方）で測定できるのか、という問題は付いて回りそうである。

常識的にはこの二つの問題を別個だと考えるけれども、心的なものとしての幸福に対する二大測定アプローチ（Angner 2009, Krantz 1991）のうちの一つ、表現測定理論（Representation Approach）では、二つを基本的に同一視する傾向があった。経済学では、その行動主義的・検証主義的な傾向のため、こちらの方法が主流だった。

古典的な表現測定理論では、潜在的な構造、変数、プロセスを措定しない。尺度は実在して観察可能なデータに因果的影響を及ぼすものではなく、構成されたものとみなされる。尺度の表現に測定と独立に真偽があるとは考えず、観察可能なデータ自体が公理を満たすということから表現の構成可能性を引き出す。そのため、理論上は誤差の余地がない（Borsboom 2005, Chapter 4）。

もう一つの測定アプローチは、サイコメトリクスで、心理学で主流のアプローチであった。サイコメトリクスでは、潜在変数を措定する。尺度は測定するか否かとは独立に存在する。尺

度の表現には測定と独立に真偽があり、データに真値との差（つまり、誤差）が出うる。この考え方だと、上の形而上学的問題と認識論的問題は区別される。

この区別の正否は、功利主義の諸前提、とりわけ幸福の個人間比較と量的な測定の可能性にかかわってくるので、以下ではまず伝統的な表現測定理論を検討しよう。

4. 幸福の測定の認識論的問題—個人の選択によって福利の尺度を構成することの困難と、個人間比較の可能性

行動主義的な傾向の強い経済学では、表現測定理論の下、個人の選択に顕れる選好によって効用（幸福、福利）を測定しようとする傾向が強かった。後で第7節でみるような「福利」概念の不確定性の問題や、福利を快苦のような意識の状態（とみえるもの）とした場合の認識論的問題を避けたかったことが一つの理由である⁽⁸⁾。これだと、個人の現在の選択肢について選択させてその個人にとっての効用を測ることはできたとしても、それを他の個人の効用と比較することが困難になる。選択している人が違うのだから、そもそも個人間比較が意味をなさないうようにみえてしまう。

経済学者のRobbins（1932）はこの理由に基づいて効用の個人間比較は科学の領分ではないと主張した。実は、個人の違う時点における効用の比較も、違う時点では（たとえば、今と1週間後で）可能だが同時には可能でない選択肢から選ばせることはできないから、困難になる。

また個人の選択が一定の公理を満たすため効用の間隔尺度を構成できる⁽⁹⁾というKrantzらの表現測定理論の効用測定への適用可能性の主張は、選択が実際にはそのような公理に違反しているというだけでなく⁽¹⁰⁾、コンテキストによって選択順序が変わるという問題⁽¹¹⁾によって、見直しを迫られている。Krantz本人がそのことを認めている（Krantz 1991; Borsboom 2005, Chap-

(8) もう一つの理由は、ある存在にとって何が善いかを決定するのは本人の選好であるべきだという、経済学によくみられる規範的な考え方だと思われる（Harsanyi 1982, 55; Scanlon 1991, 24f; Gibbard 1986, 170）。

(9) （以下の説明は、Borsboom（2005, Chapter 4）による。）表現測定理論では、測定を観察可能な関係システム $O = \langle A, R, \oplus \rangle$ （Aは対象、Rが観察可能な関係、 \oplus が対象のペアを結びつける操作）から表現システム $R = \langle N, S, \star \rangle$ （Nは数のドメイン、Sは数的関係、 \star は \oplus に対応する数的操作）への準同型写像だと考える。Krantz et al.（1971）は \oplus が外延的結合操作でなくてもよく、間隔尺度までの心理的測定もできると主張した。また、そのやり方としてのコンジョイント測定において、加法的な表現を得るために観察可能なデータによって満たされることが必要な公理は、弱順序、可解性、二重解除、アルキメデスの公理の四つであることを明らかにした。

(10) Tversky 1969が示したように、選択は推移性を満たさない場合があるので、推移性を含意する弱順序の公理を厳密にいうと満たさない。

(11) Tversky, Slovic & Kahneman 1990やTversky & Kahneman 1986などで、テストの方法やフレーミングによって選好逆転が起こることが示されている。

ter 4 も参照)⁽¹²⁾。

そもそも、ある人がAよりBを選んだとしても、それはBが自分の奉じる理念に合致するか、他の人のためになるとか考えたためかかもしれず、AよりBが自分の福利に必ずしも貢献するのかどうかは明らかではない (Sen 1977)。そこで、選択というデータから効用 (福利) の尺度を直接的に構成するという方向性はもともと困難である。論理実証主義、行動主義の魅力が薄れている現在においては、古典的な表現測定理論の前提を疑うことが自然である。実際、幸福を選択によって操作的に定義したり幸福の量を選択のみによって構成したりしてしまうと、たとえば選択がすべて同じなら脳の中で起こっていることがまったく違っていても幸福は同じだということになってしまうが、これはおかしい。二人の脳のうち、片方では報酬 (快感) 回路が活性化していて、もう片方では苦痛の回路が活性化しているのなら、選択が同じであっても二人が同じように幸福とは言いがたい。選択で幸福を操作的に定義したり幸福の量を選択のみによって構成したりすることは、幸福の度合いを知るために活用できる多くの種類のデータを無視して、選択という一部のデータに排他的に注目することなのである。福利は潜在変数であり、個人の選択はその潜在変数について知るための (誤差が付きまとう) 証拠ではあっても、それを構成するものではないと考えるのが適切だろう⁽¹³⁾。そうすることによって、選択だけでなく、人々の言動や脳活動や身体反応など様々なデータともすり合わせながら、幸福の度合いについてアプローチすることが、有意義になる。

もし福利は潜在変数だと考えるなら、福利が快苦や (選択とは区別されるものとしての) 欲求といった心的な性質に依存するものであったとしても、福利の個人間比較は意味をなす。快苦や欲求が実在し、一定の量的性質を持つとすれば、われわれは同じ自然法則に従っているのだから、すべての関連する条件が等しければ、同じだけの快苦や欲求を持つはずである。言い換えると、快苦や欲求などの心的性質とその量は、一定の自然的条件に依存し、その条件には特定の個人しか持てない特性—たとえば、フォン・ノイマン性や鈴木真性—は含まれないはずである。だから、心的性質 (の量) は自然的条件の関数と考えられるので、その関数を探究し、各個人についてその条件が成り立っているかどうか調べることで、各個人がどれだけの快苦や欲求を持っているかを原理的には比較可能な形で解明できるはずである。

なお私はここで古典的な表現測定理論を批判したが、これはその行動主義的前提の問題を指摘したのであって、その測定の公理的アプローチを問題視しているわけではない。人々の選択行動のデータ自体が一定の公理を満たさなければならないという想定は問題だが、その背後にある理論的対象としての幸福がそうした公理を満たさなければその公理に対応する仕方で測

(12) 表現測定理論は確率論的な形でも展開することができ (Roberts 1985, p. 272f)、この非古典的な形態は上記の批判をかわすことができる。しかしこの非古典的理論は、幸福は選択の観察データから構成されるという仮定を放棄し、幸福はそうしたデータから独立に存在する潜在変数だとみなすのでなければ、理解が困難である。

(13) 本稿はこの点で Reiss (2013, 225-228) に賛成する。

定できない、ということは正しい。公理論的アプローチは以下で考察するサイコメトリクスにも重要な洞察をもたらしている。

5. 幸福を心的な潜在変数として想定する測定

幸福を心的なものだとみなし、行動主義をとらず、形而上学的問題と認識論的問題の区別を認めるとしよう。とすれば、幸福は直接観察できないので潜在変数とみなして、サイコメトリクスを使うのが適切である。主観的幸福度調査は様態がいくつもあるが、代表的なのは、幸福ないし満足度の自己報告である。たとえば、「あなたは自分の生全体についてどれだけ満足ですか?」といった間に何段階（たとえば7段階）かで答えてもらう。質問紙の具体例をみてみよう。その一つの代表例は、Diener et al. 1985の生満足度（Life Satisfaction）質問紙である。以下の5項目に7段階（1. まったく当てはまらない Strongly disagree から 7. 非常によく当てはまる Strongly agree まで）で答えてもらう。

1. ほとんどの面で、私の人生は私の理想に近い。 In most ways my life is close to my ideal.
2. 私の人生は、とてもすばらしい状態だ。 The conditions of my life are excellent.
3. 私は自分の人生に満足している。 I am satisfied with life.
4. 私はこれまで、自分の人生に求める大切なものを得てきた。 So far I have gotten the important things I want in life.
5. もう一度人生をやり直せるとしても、ほとんど何も変えないだろう。 If I could live my life over, I would change almost nothing.⁽¹⁴⁾

この方式でいくと、厳密にいうとわかるのは大まかなランキングのみかもしれない、しかも個人間比較ができるかどうか微妙である⁽¹⁵⁾。というのも、（これらの質問が功利主義者の注目する意味での福利について調べるものになっているといえるとしても⁽¹⁶⁾）①たとえば最も満足しているという趣旨の回答（7段階）がそれ以外の回答の何倍かの福利を示しているとか、各回答の段階（たとえば、1～2段階と2～3段階）の間隔が同じであるなどと回答者に考えさせるようには必ずしもなっていない⁽¹⁷⁾。また、②福利の段階も本当は7段階などでおさまるとは

(14) 日本語訳は大石（2009, 48）から引用した。

(15) ここから以下のコメントには、現行の主観的幸福度調査を批判する意図はない。こうした調査をしている心理学者は倫理学者・功利主義者が注目するところの福利（の量）を測定することに携わっているわけではないのだから、彼らの調査においてそれが期待されるような仕方では測れていないと批判するのはおかしい。

(16) この点は功利主義者にとって気になるもう一つの点であるが、これについては第8節でみる。

(17) そういうように考えさせるように質問を作成することはできるかもしれないが、質問が複雑になるので

限らない。何が最上段と最下段の福利にあたるのかの判断が人によって異なるかもしれないので、そうするとたとえば個人AとBが両方同じ段階の回答をしたとしても、同じ福利のレベルにいるのかどうかには疑問の余地があり、ランキングの個人間比較ができるかどうか微妙なところがある。

ただし、こうした質問によっても福利を間隔尺度で測れるとみなしてよいという議論もある。そのうちの面白い議論の一つは、「(主観的) 福利」の計量経済学研究で著名な Ferrer-i- Carbonell & Frijters 2004 の、福利関数の推定を序数で扱っても基数で扱っても非常に類似した結果が出るというものである。これは、German Socio-Economic Panel (GSOEP: <http://www.diw.de/en/soep> 参照) における西側ドイツの労働者 30,569 件のデータを使用した研究である。このうち福利を測る質問項目は一つだけで、「あなたは自分の生全体についてどれだけ幸福 happy ですか?」ということを知ることであり、これに十件法で答えてもらっている。結果としては、報告された福利のスコアを基数的にとらえて回帰モデル1を使おうが、序数的にとらえて回帰モデル2を使おうが、どちらでも同じ要因(年齢、収入の対数、子供の数、パートナーの有無、健康感など)が福利を同じように説明する、というようになった。

$$\text{回帰モデル1: } (W_{it}^*) W_{it} = \alpha + \beta_1 x_{1it} + \beta_2 x_{2it} + \dots + \beta_n x_{nit} + \varepsilon_{it}$$

$$\text{回帰モデル2: } W_{it}^* = \alpha + \beta_1 x_{1it} + \beta_2 x_{2it} + \dots + \beta_n x_{nit} + \varepsilon_{it}$$

$$W_{it} = k \Leftrightarrow \lambda_k \leq W_{it}^* < \lambda_{k+1}$$

- W : 報告された福利スコア
- W* : 潜在変数としての、(主観的) 福利
- α : 切片
- β_n : 回帰係数
- x_n : 既知の変数
- ε : 誤差項 (既知の変数以外の変数の影響)
- i : 個人
- t : 時点
- λ_k : 潜在変数 W_{it}^* の k 番目の区分点

質問者への認知的負担が大きくなり、実際のでないという判断があるのかもしれない。またそうした聞き方をするのが意味を持つのは、福利が原理的には比率尺度や間隔尺度で測れるものだという想定ができる場合に限られるので、調査側にそのような仕方での質問するのにはためらいがあるのかもしれない。

もしくは、幸福度・満足度の測定は、そもそも、現在の満足 / 最大限の満足、のような割合を聞く意図で質問がされているのかもしれない。回答者がこうした割合を答えているのなら、先の、水中の塩分濃度の例と同じで、加法性は成り立たないだろう。

ただし、この研究は「(主観的) 福利」は個人間比較が可能と想定している。つまり、すくなくとも、もし $W_i > W_j$ なら、 $W^*_i > W^*_j$ と想定している (W : 報告された福利のスコア、 W^* : 潜在変数としての (主観的) 福利、 i, j は任意の個人のペア)。(主観的) 福利は個人間比較が可能という両者のモデルの想定を受け入れない人なら、どちらのモデルも受け入れ難いので、両者の結果が一致しても、福利が間隔尺度で測れるということを認めることはないだろう

私としては、この研究の結論というより、その方法論を擁護したい。この研究の結果を受け入れないとしても、福利が間隔尺度や比率尺度で測れているかどうかは、その想定で出た結果がより弱い想定の下で出た結果と同じ (かあるいはすくなくとも矛盾しない) かどうか、という保存という観点から考えるという方法論自体は、有望な考え方だと思う。このような保存という要請に基づく研究の方向性は、温度測定の発展の歴史において成功したように (Chang 2004)、幸福の測定においても有望だろう。

功利主義者にとっては問題山積だが、今まで述べたサイコメトリクスの測定の困難の多くは必ずしも原理的な問題ではなく、心理学者や行動経済学者に研究協力してもらえればある程度克服できるものなのかもしれない。たとえば、サイコメトリクスで直接の測定対象とされるのは、その統計的手法ゆえに、個々人の性質 (個人の幸福度) ではなく、母集団の性質 (幸福度の平均、分散など) である。通常、誤差はサンプルの値が母集団の真なる値から持つずれとしてとらえられる。統計的手法はサンプルに非系統的誤差があっても母集団の値を推定できるようになっているので、上記で指摘したような各個人の質問紙理解の個人差や回答の仕方の差異などは集団レベルでは無視できるものになっているかもしれない。ただし、それにはサンプルが十分な数とられているというだけでなく、母集団を代表するような形で偏りなくとられていることが前提で、現実的な制約のためにサンプルをランダムにとっていない通常の心理学や行動経済学の調査では満たされているかどうか疑問の余地のある仮定である (高野 2000 を参照)。とはいえ、これが原理的な問題ではなくて単に実際的な問題であることは明らかだろう。

ただし功利主義においては、その応用では集団の幸福度の平均や分散などについて知ることが有用であるが、究極的には個々人の幸福度が重要なので、そこが直接調べられないのには不満が残る。さらに、質問紙調査で主観的判断を聞く場合には、(質問への答えの背後に心的判断があるということがどのように保証されるのかという一種の他我問題を単に思弁的なものとみなして脇に置くとしても) 内観報告の信頼性への疑念が当てはまることになるだろう。直接に個人の幸福を測れ、内観を利用しなくてもすむ客観的な幸福の尺度が魅力的にみえる理由はここにある。次は福利を心に依存しないものと想定する客観説の場合について考察してみよう。

6. 幸福を心から独立なものと想定する場合の測定

これまでは福利が心的なものに依存すると想定してきたが、福利を心的なものから独立なものとみなすことも可能である。たとえば、身体的健康、個人的自由、友人関係、達成 (achieve-

ment)などは、欲求や快苦などとは無関係に、人の幸福を構成する、という立場が考えられる。このように福利を心から独立なものと想定する場合、測定が容易であると想定されがちである。

たしかに、このような客観説においては、内観報告の信頼性をどう確保するかという問題には悩まされないですみ、このため福利の個人間比較に関する認識論的な問題も緩和されそうに見える⁽¹⁸⁾。けれども、「人は色々な仕方で幸福になりうる」という趣旨の直観をくみとるために、客観説では福利の要素が複数指定され、しかもそれぞれがかなり抽象的な仕方で特定される傾向がある。たとえば、身体的健康、自由、友人関係、達成といった要素はかなり抽象的である。

そうすると、各福利の要素は観察に基づいてどう測れるのかという問題を背負い込むことになる。それ自体は福利ではないが、それと相関しており、観察しやすい量を、福利の指標とみなして測定し個人間比較することはより簡単で有益だが、それは福利自体を一定の仕方で測定し比較することは異なることに注意する必要がある。主観説でも非心的なものを福利の指標として扱うことはできるのである (Suzuki 2015)。

福利はベクターでしか表せないものになるのではないかという懸念はもちろんある⁽¹⁹⁾。たとえば、身体的健康、個人的自由、友人関係、達成といった異質な諸要素をどう比較できるのだろうか。統一的尺度を導入しようとする、それは人々の心や意識へ影響や欲求・選好に基づかざるをえないように思われるが⁽²⁰⁾、これは客観説にはできない。この疑念が正しければ、幸福の客観説は内観報告の信頼性の問題を避けて、福利がスカラーで表せなくなるという問題に遭うことになるわけである。先に指摘したように、福利の異なる構成要素が比較できないなら、個人間比較の問題が生じるだけでなく、二タイプの福利の構成要素を同一人の生において比較している際にも問題が起こる。

なお、現在の心的なものとしての幸福の測定が内観報告に頼る場合が多いからといって、これがいつまでもそのままでありつづけなければならないわけではないだろう。心的状態は身体、特に脳の状態によって実現されているのだとすると、科学研究が進めば心的状態とその性質を実現している物的な状態や性質が特定されることが期待される。こうした物的な状態や性質を

(18) この言明は、客観説では心に依存する幸福の構成要素がないという前提に基づいている。しかし幸福の哲学においては、何か心から独立に福利の構成要素になることが可能であるという説はすべて「客観説」と呼ぶという傾向がある。このような弱い意味での客観説では、快苦や徳や知識など心の状態ないしそれに依存するものを福利の構成要素の一部に含むことがあり、それらについては主観説の認識論的問題が残る。

(19) もちろん、当該の各要素がなぜ福利を構成するのか、他のものはなぜそうでないのか、という疑問も残る。複数の異質な要素がすべて福利を構成するというに何らかの理由があるとすれば、それは人々の心や意識や欲求に対して同様な影響を及ぼすからではないのだろうか。内観報告の信頼性の問題を避けたいという動機づけは理解できるものの、こうして福利の統一的な説明に難を持つという点で、福利を非心的なものとして想定するには疑問が残る。

(20) 自己完成への貢献度や、環境に対する適応への貢献度などといった統一的尺度で評価するという考えもありうる。しかし、どちらも抽象的で曖昧だというだけでなく、当人にとってどうしてその基準が究極的に重要なのかということの説明が難しい。

測定することで幸福の状態を測定できるという見込みがあるなら、内観に必ず頼る必要があるわけではない。

ここまでの節でみたように、心的幸福の測定に関しては、古典的な表現測定理論のように行動主義的な前提を置けば不可能になっても不思議はないが、そもそもこの前提が疑わしい。サイコメトリクスによって功利主義にとって必要な測定ができるかどうかということにまつわる問題の多くは、重大なものであるが原理的な問題ではないと判明するかもしれない、決定的なものではない。ここまでのところでは、幸福を心から独立なものとしななくとも幸福を測定できるという見込みがないとはいえない。

7. 幸福関連概念の不確定性

しかし、幸福の測定に関してはもっと扱いづらい問題がある。近年まで幸福の測定の可能性に懐疑的な人も多かった。その大きな理由は、「幸福」「福利」やそれと関連する概念である「利益」「生の質 (QOL)」といった語あるいは概念は、科学的な専門用語ないし概念として導入されたわけではないので、多義的で文脈依存的でしかも曖昧なところがあるようにみえるからだ (Griffin 1986, 79-83; Broome 2004, Chapter 12)。van Deemter (2009, 2) は、「複雑な概念—ほんの数例を挙げれば、正義、美、幸福—などが関係しているところでは、精度 (precision) という考えそのものが想像し難い。」とまで述べている。この不確定性の現れにみえるものは色々ある。たとえば、倫理学における福利の理論は、代表的なものだけで何タイプもあり (快樂説、選好充足説、生満足説 (Life Satisfaction Theory)、客観リスト説、完成説、などなど)、容易に決着がつきそうにない。社会科学におけるその使用も多義的であるという指摘がある (Alexandrova 2012)。現実の幸福測定において幸福は様々な仕方であらわれていて、心理学者の Cummins (2013, 185-186) などは (主観的) 幸福の測定に関して次のように述べる。「幸福を理解することに対する持続的な障壁は、その語の意味それ自体である。…これらの意味すべては互いに違いすぎているので、測定に関する文献を「幸福」という語の下に集めるだけでは情報価値がないだろう。」。また、どのラインで幸福な人生とそうでない人生 (あるいは、不幸な人生) が分かれるのかということにはっきりした答えがあるようにはみえず、その答えは比較対象などの文脈による部分があり、また境界事例があるようにみえる。

このように不確定性があるとすれば、日常的な意味における「幸福」の測定、すなわちそのランキングや量が焦点なら、第1節でみたような代表的な功利主義の福利の測定に関する前提は支持することが難しいだろう。けれども、功利主義者たちが「福利」の専門的用法を導入しようとしていると考えるなら、そこで話は終わりではない。功利主義者たちの目的からすれば、誰かにとって善く、道徳的観点からみて重要であるという評価を支えられるような、それでいて一定の仕方であら可能な意味での福利の定義 (理論) を構築できるなら、それで部分的には満足できる結果である。結局これは、「福利」やそれに関連する語や概念を改訂的に定義して、

科学的に探究可能な対象に還元するか、あるいはそうした対象によって構成されるものを意味するようにするという、自然主義的な方向性をとることになる。もちろん、これは「福利」の意味やそれを使って立てられる問を現状から変えることになり、それゆえ反対する論者もいる (Broome 2004, 179)。しかし、これらの語や概念からより厳密な専門的語 (や概念) を作り出すことにより、道徳をより安定的な基礎に置き、事実に基づいて議論できるようになるなら、この改訂的なプロジェクトには大きなメリットがあると思われる。

功利主義者がある程度規約的に定義するところの「福利」が測定できるかどうかというのは、(1) それがどのように定義されるのか、ということと、(2) 福利の定義項に出てくる性質ないし関係がどのような測定を許すのか、という二つの条件 (問題) によることになる。これらの点を、かなり単純だと考えられている福利の定義としての快樂説を例にとってみよう。

快樂説は快だけを当事者にとっての利益とみなし、苦だけを当事者にとっての不利益とみなし、総合的な福利は快さと苦しみの量によって決まるとする説である。不確定性の一つは、快と苦というのがどんなものかについて論争があり、しかもその論争に唯一の答えがあるのかどうかについても疑問がありうるということである。たとえば唯物論者ならば、快や苦が実在するのかという疑問が生じるだろうが、この問も結局快や苦がどんなものであるかという点が必ずしも明確ではないため、ある快や苦の定義の下では存在するが別の定義の下では存在しないということになっても不思議はない。実際、快の本性についても苦の本性についても複数の理論が並立しており、それぞれの中に異質なものを含むといった主張がしばしばなされるのは、ある程度この快や苦の概念の不確定性の現れではないかと思われる⁽²¹⁾。測定に関連して言えば、たとえば、快は本質的に経験であって、快はその経験の質 (クオリア) の量なのか、それとも快は一定の表象であって、快さはその表象された対象の量だったり、その表象のヴィヴィッドさだったりするのか、ということが、快をどう測ればよいのかという問に大きく影響するだろうが、そもそもこれらの問について明確な答えはないかもしれない。「快」も「苦」も日常的な概念なのだから、こうした問いに明確に答えられるほどの厳密さを持ってはいないのではないかという疑いがある。

また実は先の、よくある快樂説の定義は曖昧で、快と苦をどう合算したらよいか、という問題が隠れている。快と苦が異質なものなら、どう統合するかが問題になり、統合できなければ、総合的福利 (純利益) をスカラーで表せない。Bentham (1789, chapter 4) の功利計算では、快 (の単位) を +1 とし、苦 (の単位) を -1 とみなして足し合わせたものを純利益とみなすことになっているが、福利にとっては苦の方が重大だから、苦の1単位を -2 とかにしたらどうか、といったような提案が考えられたりもする。より極端な立場として、快の価値はニュートラル

(21) 快と苦についての諸々の哲学理論に関しては、たとえば、Stanford Encyclopedia of Philosophy の “Pleasure” (Katz 2014) と “Pain” (Aydede 2013) の項目を参照。

(0) で、苦の負の価値だけを考慮に入れる消極的功利主義もある⁽²²⁾。Bentham流の自然主義的功利主義の立場からは、快と苦が単一の軸で反対の価値を持つというのを何らかの自然的根拠に基づけたいところだが、なかなかそれは難しいようにみえる。たとえば脳神経科学者のD. J. LindenはBenthamを批判して次のように言う。「しかし、苦と快は一本の棒の両端ではない。そう考えるだけの理由がある。快の反対は苦ではないのだ。愛の反対が憎しみではなく無関心であるのと同じように、快の反対は苦ではなく倦怠、つまり感覚と経験への興味の欠如なのである。」(Linden 2011, Ch. 6; 邦訳p. 205) Benthamの様な単純な考え方は単純だということ以外には支持する根拠が見出しにくい。

また先に述べたように、そもそも快自体が等質のものなのかということは疑いの余地があるので、快の「強さ」の比較ですら問題を含む。たとえば、Mill (1863, Chapter 2) は快には質の差があると主張しており、これが低級な快と高級な快に無限の差があるという主張を含意すると解釈すると(鈴木2000)、この二タイプの快を含む間隔尺度以上の尺度は作れないことになる⁽²³⁾。

このように、かなり単純だと考えられている快樂説ですら、様々な要素ないし次元の複合体として福利をとらえることになっており、様々な不確定性のもとを抱え込んでいる。一般的に、福利を様々な要素ないし次元の複合体としてとらえたら、尺度がベクターになるか、それらの要素からスカラーの値を決める「関数」に不確定性が入り込むことは避けられないように思われる。たとえば、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルという三区分を福利に入れようとすると、こうしたことが起こりやすいだろう。こうした問題に関しては、科学的知見の助けを借りて福利として定義されたものの本性をより厳密に把握しながら、「福利」、そしてそれを定義するものを、定義の目的を参照しながら確定していくしかないだろう。この過程と結果にある程度恣意性が生じるのは避けられないのだろうか。

8. 「誰かにとっての善としての幸福」という制約

規範理論である功利主義が幸福を定義する際の目的を考えてみると、功利主義にとって必要な「幸福」の概念は日常的概念でなくてよく、「誰かにとっての善としての幸福」の概念である。そこで、日常的概念としての「幸福」に不確定性があるとしても、「誰かにとっての善」という条件を満たす方向に幸福の概念を精緻化していけばよいのではないかという考えが浮かぶ。このようにして不確定性を恣意性無しになくすることができるのではないか。

たとえば、先ほど触れたように、幸福の客観説は、幸福が誰かにとっての善であるという直

(22) 消極的功利主義の主張についてはPopper (1966: 284-285, note 2) をみよ。消極的功利主義の批判としてはGriffin 1979を参照。

(23) 任意の2つの量aとbについて、bをn倍するとaをこえるというnがある、という趣旨のアルキメデスの公理に違反するため。

観をうまくすくえないかもしれない。たとえば、達成が幸福の一部であるという客観説は、達成欲も達成をえることからの快も持ってない人にとってなぜ達成が善いものなのかを説明するのに苦勞するかもしれない。だから、幸福の客観説は「誰かにとっての善としての幸福」という制約によって斥けることができるかもしれない。

この提案は魅力的なものだし、適切な方向への第一歩だと思うが、2つの点で懸念がある。第一の点は、「誰かにとっての善としての幸福」という制約は、幸福とその量を定義する際に一つの理論的選択肢を残して残りを排除することはできないのではないかということである。客観説を斥けて、幸福は心に依存すると考えるとしても、色々な理論的な可能性—快楽説や欲求充足説や生満足説など—があるのであり、このうちどれが適切かを上記の制約だけで決められるだろうか。また、たとえ一つの理論に、たとえば快楽説に選択が絞られたとしても、快楽をどのように規定したらよいかという点について明確な答えが出るとは考えにくい。たとえば、快と苦をどう合算したらよいか、という問題について、「誰かにとっての善としての幸福」という制約から明確な答えが出るかどうかは疑問である。

もう一つの、より重大な懸念は、「誰かにとっての善としての幸福」という制約は、功利主義者が善に課す要請を前提すれば、一面では強すぎるのではないかということである。そもそも幸福が比率尺度ないし間隔尺度で測れなければいけないとか、個人間比較ができなければいけないというのは、純粋に科学的な観点からすれば、そうあったら（測定や比較がしやすくて）便利ではあるが、必ずしも正しくある必要はない事項に過ぎない。こうした前提は、功利主義者が幸福に対して善として満たすべき性質を投影しているから想定されているといってよい。しかもこれらの前提は、何らかの対象が満たせばそれでよいというのではなく、その度合いと本人にとっての善さの度合いが比例するような形で満たされなければならないという点が、要求が厳しいところである。

たとえば、個人的自由の度合いが比率尺度で測れ、個人間比較もできるとしよう。それでも、自由の度合いに比例して本人にとって善い、ということが擁護できなければ、自由が「誰かにとっての善としての幸福」という制約を満たすとはいえない。たとえば、個人的に選択できる事柄や選択肢が増えれば個人的自由の度合いが増えるというように考えるとすれば、たしかに個人的自由の尺度を定量化できるかもしれないが、個人的自由が増えるのと比例して本人にとって善いという主張を擁護するのは難しいかもしれない。人はいつでも選択できるという状況では不安を感じ、選択肢が多ければ困惑し満足する選択ができなくなったりするかもしれないが（Schwartz 2003）、それでも個人的自由は増えれば増えるだけ本人にとって善いといえようか。

別の例として、欲求の充足について考えてみよう。欲求が比率尺度で測れ、個人間比較もできるとしても、欲求充足の度合いに比例して本人にとって善い、ということが擁護できなければ、欲求充足が「誰かにとっての善としての幸福」という制約を満たすとはいえない。私たちは自分の欲求が充たされるのが（自分にとって）善いと漠然と考えているようにみえるが、欲

求がすべて満たされる方が善いか、とか、非常に強い欲求を非常にたくさん持ってそれが充足される方が、充実した生を送るのに必要最低限の欲求だけを持ってそれが満たされるのよりも善いか、とか聞かれば困惑するだろう。ブッダ(中村 1984:第4 八つの詩句の章 1. 欲望)のように、必要のない欲求をできるだけ持たない方が、欲求があって充足されるよりも、当人にとって善いというような考えも魅力がないわけではない⁽²⁴⁾。欲求が充足されればされるほど当人にとって善いといえるかどうかという点は、疑問の余地のある論点である。

より具体的な例として、先ほどのDienerらポジティブ心理学者たちがやっているような「(主観的) 福利」の測定について考えてみよう。「(主観的) 福利」の測定が本当は何を調べているのかということについて、Cummins (2013, 186-189) は以下のような三つの可能性を挙げて、自分自身は3を支持している。

1. 食い違い説 (Discrepancy theories)

現在の知覚された現実と、自分の志望するものとのギャップ (の小ささ) を測っている。ギャップが小さいとみなされるほど、幸福度が高くなる。

2. 正と負の情動と認知的自己評価の三つ組みモデル (The tripartite model)

幸福度・満足度は、正の情動的要素と、負の情動的要素 (の少なさ) と、自分のこれまでの様々な体験に総括的に基づく自分の人生の認知的な自己評価を測っている (Dienerらの立場)。

3. 恒常性調整機能で保護されたムード (Homeostatically protected mood)

恒常性維持機構によって維持・統制された、深く安定的で肯定的なムードを測っている。

三つのいずれにせよ、日常的な意味における福利はともかく、功利主義者が求めるような意味での福利が測られているといえるかどうかは疑問である。一つには、これらの値が高ければ高いほど当人にとって善いのか、というと必ずしもそうではないからである。1のギャップ判断の場合、たとえばその人が志望するものをどんどん低く現状からの変化が要らないように設定するほど高い点が出るだろうが、それが当人にとって善いこととは言い難いだろう⁽²⁵⁾。たとえば、2の認知的自己評価の側面について、現実を認識ないし直視できなくなるほど高い点が出るかもしれないが、それはその当人にとって善いこととは言い難いだろう。3の恒常性調整

(24) 西洋にも、個々の具体的事物に対して多くの強い感情 (欲求を含む) を持つことは、自分を不幸にする傾向があるので、できるかぎりそれを避けるようにした方がよい、というストア派やSpinoza (1677, 第4巻) の伝統がある。

(25) そもそも、1や2が正しい場合、直接測られているのは、自分の生についての満足・幸福の判断傾向であり、それ自体として当人にとって重要であるかどうかは疑問である。快樂や苦痛の量は当人にとって重要であり幸福を構成するかもしれないが、快樂や苦痛の量がどれくらいだという判断傾向が当人にとって重要だとか幸福を構成するということはないのと同様である (福利の指標としては役に立つかもしれないが)。

機能で保護されたムードの場合、奴隷や極貧の人でも恒常性が活発に機能していれば高い点が出るかもしれない、それは当人にはある程度善いことかもしれないが、同時に非常な苦境にとどまるだろうから、全体的にみて当人にとって善いとはいえないかもしれない⁽²⁶⁾。

「幸福が増えると事態が当人にとって悪くなる」とか「幸福が増えても事態は当人にとって善くならない」といったことが起こっても問題がないなら、世界の中から測定可能な「幸福」を選び出すのには苦勞しないかもしれない。しかし、上の例が示唆するように、「誰かにとっての善としての幸福」という制約を、功利主義者が善に課す要請と結びつけるなら、何も満たす対象がなくても不思議ではない。

とはいえ、そもそも功利主義の様な規範理論が幸福に注目したのは、「誰かにとっての善」の候補として幸福が魅力的だったからである。だから、規範理論にとってこの制約を取り外すことは、幸福をその中心的な役割からおろすことにつながる。別の、より魅力的な選択肢は、功利主義者が善に課す要請を弱めるということであろう。最後にこの方向に向けて考えてみる。

9. 善に関する要求を弱めること

日常的な意味における「誰かにとっての善」の概念においては、比率尺度や間隔尺度はおろか、順序尺度も完全に成り立つのかどうか疑問の余地がある。というのも、Griffin (1986, *ibid*) が指摘しているように、日常的な意味における「……にとってより善い」「……にとって同等に善い」「……にとって同等以上に善い」といった語あるいは概念は、おそらくそれ自体曖昧であるからだ。その意味においては順序尺度の条件である完備性 (completeness: for all $a \neq b$, aRb or bRa) や推移性 (transitivity: aRb & $bRc \rightarrow aRc$, for all a and b) ですらすべてのケースでは成り立たないだろう。というのは、たとえば「……にとって同等以上に善い」が曖昧だとすれば、何らかのペア a と b について、それらは同じくらい善いが厳密には同等に善いわけではないため、ある当事者にとって a は b と同等以上に善いということは確定的に真ではなく、 b が a より同等以上に善いということも確定的に真ではないため、完備性が成り立たないということが起こる。また、同じくらい善いが厳密には同等に善いわけではないという関係は (類似関係

(26) Feldman (2010, Chapter 3) は、心理学におけるもう一つの代表的な福利の考え方・測定法である Kahneman 1999 の「客観的幸福」説について批判しているが、その根拠も結局この説が規範理論、特に功利主義的な理論の想定する意味での福利をとらえていないということである。私は心理学批判には賛成しない。Feldman は幸福には本質的な定義があって、それは規範理論において関心の対象となる類のものであり、心理学者などの科学者も幸福の測定においてはそれを調べるべきだ、という前提を持っているように思われるが、私はこの前提を支持しないからである。幸福の概念は不確定であり、各分野はそれぞれの目的に従って幸福をある程度規約的に定義してよいと考える (鈴木2014)。しかし、Kahneman の説も、Diener らのものと同様、規範理論、特に功利主義的な理論の想定する意味での福利を捉えていないのではないかと、という疑問自体は妥当な疑問だと考える。

が推移的ではないのと同じ理由で) 推移的ではない。

だからといって誰かにとっての善、あるいは幸福が完備性や推移性を満たさなくても全然構わない、というわけではない。そういう性質が善あるいはそれを実現する幸福になれば、どちらが善い状態なのか、そしてどちらを選ぶべきなのか、決められないことが出てくる。規範理論としてはこれはできれば避けたい事態である。しかし、完備性や推移性がどんな文脈でも成り立つという性質を持てなければ善ではない、幸福ではない、という要請を絶対的なものとして置く必要はないだろう。その要請をできるだけ満たすものを見つめる、という方向性でよいのではないかと思われる。

また、日常的な意味における「誰かにとっての善」の概念は、規範理論にとって必ずしも必要のない部分を含んでいるかもしれない。たとえば、日常的な意味における「誰かにとっての善」の概念は、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルの三区分を立てているようにみえる。つまり、善、悪、中立、という価値の非相対的な区分があって、総合的評価はこのバランスで決まるという想定である。しかしこのような絶対的な意味での価値の区分は、規範理論にとって、特に功利主義にとって、必要ではない。選択肢を相対評価できれば、絶対評価できなくても、それが誰にとって善いか、どの選択肢をとるべきか、決定できる。

私がここで言いたいことは、功利主義者などの規範理論家が「誰かにとっての善」に対する要請を通じて「幸福」に課していた制約は、必ずしもそのまま受け入れる必要はないかもしれないということだけである。日常的な意味での「幸福」概念と規範理論における期待を踏まえて、世界の中から最も「誰かにとっての善」としての「幸福」としての条件を満たすものを探すことが適切な方向であると思う。もちろん、功利主義者が期待していた条件をすべて満たすものがあるとは限らないが、それでもある程度条件を満たし、「幸福」として、「誰かにとっての善」として、その名に値するものを探し出せる見込みはあると思う。「福利」やそれに関連する概念である「利益」「幸福」「生の質 (QOL)」「……より幸せ」といった語あるいは概念は、何か現実に存在する性質ないし関係を指示しているようにみえる。大枠において人々は利益を求め相対的な不利益を避けるよう行動しているように見えるし、利益になることに対して喜び相対的に不利益になることに対して悲しんだり憤ったりしているように見える。あまり多くを求めなければ、「幸福」として、「誰かにとっての善」は実在し、測定できるということを期待しよように思われる。

10. 暫定的結論

功利主義の目的として、誰かにとって善く、道徳的観点からみて重要であるという評価を支えられるような、それでいて一定の量的な仕方で測定可能な意味での福利の定義(理論)を構築することを考えた場合、これはすくなくとも今のところ理想であって現実ではない。たとえば、総量功利主義が要求するように、福利を比率尺度で個人間比較できるスカラー量として表

すのはかなり難しい。ただそれは、個人間比較が原理的に不可能だとか、福利とはそもそも量的なものではないからということが明らかだから、ではないだろう。古典的な表現測定理論の枠組みで、選択という観察可能なデータから福利の尺度を構成しようとするれば個人間比較は意味をなさず尺度を構成できないかもしれないが、それはその測定のアプローチの問題のように思われる。福利を主観的なものとみなすなら、福利を潜在変数としてみて、サイコメトリクスのアプローチを採用すべきだろう。サイコメトリクスによって幸福を検討する際にも様々な問題があるが、心理学や行動経済学や脳神経科学などの助けを借りて、これらの点はある程度克服できるかもしれない。たとえば、「福利」によって指示される対象—候補としては、快苦、欲求の充足、自分が好むものを得ることなど（鈴木 2014）—がどんなものなのかということがいまだあまりよくわかっておらず、また個人の福利を測定するのにも難点があるといった点については、諸科学の進展とともに解消されていく実際的な問題と考えてよいところがある。個人的自由や健康といったものを心から独立した幸福の構成要素と考える場合にも、社会科学や医学などの協力により適切な操作化に基づく測定が可能になるかもしれない。

しかし「福利」やそれを定義する語や概念に不確定なところがあるという難点はより深刻である。「福利」を特定していこうとする際には、一定の恣意性が残るのは避け難く、功利主義者の福利の理論が議論の余地のないものに仕上がることはありそうにない。この恣意性は「誰かにとっての善としての幸福」という規範的な用途から課す制約を入れても、完全になくなることはありそうにない。

また、この制約と功利主義者が「善」とその測定可能性に要請するものを合わせると、これを完全に満たすものが世界にあると考えることがかなり厳しいものとなるだろう。この際に、幸福は世界のうちにあるものではなく、非自然的なものだと考えたくなるかもしれないが、その場合功利主義者は自然主義をあきらめて、この世界における人々に対する現実の影響によってなすべきことを決めるという理念を捨てることになる。本稿で私が勧めたのは、功利主義者の「善」とその測定可能性に対する要請はそれ程自明なものではないので、それを現実に合わせて弱めることを考えるということだった。つまり、測定に関して普通より弱い想定のもとで功利主義的理論を展開するという道も残されており、そちらの方向にも目を向ける必要があるということである。たとえば、比率尺度を要求する総量功利主義ではなく、それより弱い尺度ですむ平均功利主義を選んだり⁽²⁷⁾、ポジティブ・ネガティブ・ニュートラルの区分を前提しない福利の理論を選んだりする理由があると言えるかもしれない。さらに、Sen (1970, Chapter 7) は不完全な間隔尺度と不完全な個人間比較可能性の下で福利の弱い意味での加法性を保持する方策を検討している (Sen 1997, Chapter 3 も参照)。このような方向性を考慮に入れながら、

(27) Hirose (2015, 184–185) は、(各人の全体的福利レベルに差が小さい方が善という) 平等説が(全体的福利レベルが絶対的な意味で低い人の福利には大きな重みづけをする) 優先説よりも弱い尺度を要求することを、平等説を優先説より支持する理由として挙げているが、ここでの議論はそれと同種のものである。

世界にある物事が功利主義者の「善」に対する期待をどれほど満たせるのかを踏まえて、幸福とそれに基づく規範の理論を構築していくのが、自然主義功利主義に魅かれた理論家の現実的な姿勢であろうと思われる。したがって、Broome (2004, esp. 260) のように、まず(誰かにとっての)善の条件をアプリアリに確定しておいて、それからその条件を満たすものを世界の中から探す、というアプリアリな理論化を先行させるアプローチには問題があると考えられる。

なお、このように改変された規範理論は典型的な功利主義よりも複雑になるはずなので、意思決定に使うのは難しくなってしまうだろう。だから、典型的な功利主義の測定に関する前提が満たされないものだとしても、私たちが日々直面する状況においてその前提が大体満たされるのであれば、典型的な功利主義は一種の理想化として役に立つかもしれない。たとえば、幸福は厳密には間隔尺度で測れるための条件を満たさないかもしれないが、平均功利主義はその単純さのためにより正確な規範理論よりも意思決定において行為を導くのに役に立つかもしれない—我々の有限な能力や時間、そして複雑な規範理論を学んで適用するのにかかるコストを前提すれば、より正確な規範理論の見地からもその使用が正当化されるかもしれない。規範理論の構成は、(幸福の規定の恣意性を一定程度認めつつ)より正確な理論を目指す方向と、現場で役に立つ理想化を追求する方向の二つがあってよく、典型的な功利主義は前者の方向では生き延びなくても後者においては適正かもしれないのである。

謝辞

本原稿の刊行は、平成25-27年度科学研究費補助金、挑戦的萌芽研究「幸福の哲学を経験科学と繋ぐための基礎的研究」(代表者：鈴木真)の支援によって可能になったものである。

この原稿は、2015年2月14日に開催された道德・社会認知研究会第3回(東京大学駒場キャンパス16号館107号室)における発表、「倫理学と経済学における帰結主義的伝統と価値の測定」がもとになっている。発表に対して質問やコメントを頂いた方々にここで感謝の意を表したい。

文献

- Angner, Eric (2009) "Subjective Measures of Well-Being: Philosophical Perspectives" In *The Oxford Handbook of Philosophy of Economics* edited by H. Kincaid and D. Ross, Oxford University Press, 560-579.
- Alexandrova, Anna (2012) "Values and The Science of Well-Being: A Recipe for Mixing" In *The Oxford Handbook of Philosophy of Social Science* edited by H. Kincaid, Oxford University Press, 625-645.
- Arrhenius, Gustaf (forthcoming) *Population Ethics: The Challenge of Future Generations*.
- Aydede, Murat, "Pain." *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2013/entries/pain/>.
- Bentham J. (1789) *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*. ((1967) 『世界の名著38 ベンサム、J. S. ミル』中央公論社に山下重一による抄訳が所収)
- Brennan, Geoffrey (2007) "Economics" In *A Companion to Contemporary Political Philosophy* 2nd ed. edited by Robert E.

- Goodin and Philip Pettit, Wiley-Blackwell, 118–152.
- Broome, John. (2004) *Weighing Lives*. Oxford University Press.
- Borsboom, D. (2005). *Measuring the Mind: Conceptual Issues in Contemporary Psychometrics*. Cambridge University Press.
- Chang, Hasok (2004) *Inventing Temperature: Measurement and Scientific Progress*. Oxford University Press.
- Cummins, R. A. (2013). “Measuring Happiness and Subjective Well-Being.” *The Oxford Handbook of Happiness* (Oxford University Press), 185–200.
- Diener, E., R. A. Emmons, R. J. Larsen, and S. Griffin (1985). “The Satisfaction with Life Scale.” *Journal of Personality Assessment* 49(1): 71–75.
- Elster, John and E. Roemer eds. (1991) *Interpersonal Comparisons of Well-Being*. Cambridge University Press.
- Feldman, Fred (2010) *What Is This Thing Called Happiness?* Oxford University Press.
- Ferrer-i-Carbonell, Ada, and Frijters, Paul (2004). “How Important Is Methodology for the Estimates of the Determinants of Happiness?” *The Economic Journal* 114: 641–659.
- Gibbard, Allan (1986) “Interpersonal Comparisons: Preference, Good, and the Intrinsic Reward of a Life” In *Foundations of Social Choice Theory* edited by Jon Elster and Aanund Hylland, Cambridge University press, 165–193.
- Griffin, James (1979) “Is Unhappiness Morally More Important than Happiness?” *The Philosophical Quarterly* 29 (114): 47–55.
- Griffin, James (1986) *Well-Being: Its Meaning, Measurement and Moral Importance*. Clarendon Press: Oxford.
- Harsanyi, John C. (1982) “Morality and the Theory of Rational Behavior.” In *Utilitarianism and Beyond* edited by A. K. Sen and B. Williams, Cambridge University Press, 39–62.
- Hirose, Iwao (2015) *Egalitarianism*. Routledge.
- Kahneman, D. (1999) “Objective Happiness” In *Well-Being: The Foundations of Hedonistic Psychology* edited by D. Kahneman, E. Diener and N. Schwarz, Russell and Sage Foundation, 3–25.
- Katz, Leonard D., “Pleasure.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/pleasure/>.
- Krantz, David H. (1991). “From Indices to Mappings: The Representational Approach to Measurement.” In D. R. Brown and J. E. K. Smith (eds.) *Frontiers of Mathematical Psychology: Essays in Honor of Clyde Coombs*. Springer New York.
- Krantz, D. H., R. D. Luce, P. Suppes and A. Tversky (1971). *Foundations of Measurement, Vol. I: Additive and Polynomial Representations*. Academic Press.
- Linden, David J. (2011) *The Compass of Pleasure: How Our Brains Make Fatty Foods, Orgasm, Exercise, Marijuana, Generosity, Vodka, Learning, and Gambling Feel So Good* (岩坂彰訳 (2012) 『快感回路: なぜきもちいいのか、なぜやめられないのか』 河出書房新社).
- Mill, John Stuart (1863) *Utilitarianism* (川名雄一郎・山本圭一郎 訳 (2010) 『功利主義論集』 京都大学学術出版会に所収).
- Nussbaum, Martha C. 2000. *Women and Human Development: Capabilities Approach*. Cambridge University Press (池本幸生、田口さつき、坪井ひとみ 訳 (2005) 『女性と人間開発—潜在能力アプローチ』 岩波書店).
- Popper, Karl R. (1966) *The Open Society and Its Enemies Volume 1 The Spell of Plato* 5th Edition. Princeton University Press (内田詔夫、小河原誠訳 (1980) 『開かれた社会とその敵 第1部 プラトンの呪文』 未来社).

- Rawls, John. (1971) *A Theory of Justice*. Harvard University Press.
- Reiss, Julian (2013) *Philosophy of Economics: A Contemporary Introduction*. Routledge.
- Robbins, L. (1932). *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*. Macmillan (中山伊知郎監修・辻六兵衛訳 (1957) 『経済学の本質と意義』、東洋経済新報社).
- Roberts, Fred S. (1985) *Measurement Theory with Applications to Decisionmaking, Utility, and the Social Science*. Cambridge University Press.
- Roemer, John E. (1996) *Theories of Distributive Justice*. Harvard University Press.
- Scanlon, Thomas M. (1991) “The Moral Basis of Interpersonal Comparisons” In *Interpersonal Comparisons of Well-Being* edited by Jon Elster and John E. Roemer, Cambridge University Press.
- Schwartz, Barry (2003) *The Paradox of Choice: Why More Is Less*. Ecco.
- Sen, Amartya (1970) *Collective Choice and Social Welfare*. Olver and Boyd. (志田基与師監訳 (2000) 『集合的選択と境的厚生』 勁草書房)
- Sen, Amartya (1977) “Rational Fools: A Critique of the Behavioral Foundations of Economic Theory.” *Philosophy and Public Affairs* 6(4): 317-344. (大庭健・川本隆史訳 (1989) 『合理的な愚か者：経済学＝倫理学探究』 勁草書房に所収)
- Sen, Amartya (1985) *Commodities and Capabilities*. North-Holland. (鈴木興太郎 訳 (1988) 『福祉の経済学—財と潜在能力—』 岩波書店)
- Sen, Amartya (1997) *On Economic Inequality* Expanded Ed. Clarendon Press: Oxford. (鈴木興太郎・須賀晃一訳 (2000) 『不平等の経済学 改訂版』 東洋経済新報社)
- Spinoza, Baruch de (1677) *Ethica ordine geometrico demonstrata*. (畠中尚志訳 (1951) 『エチカ—倫理学』 岩波文庫)
- Stevens, S. S. (1957) “On the Psychological Law.” *Psychological Review* 64: 153-181.
- Suzuki, Makoto (2015) “Well-being and the Problem of Adaptation to Prior Experiences” In *The Proceedings of the International Symposium on Memory and Human Well Being: Interdisciplinary Perspectives* edited by Yahei Kanayama, Malhar Kulkarni, and Toshiya Unebe, Graduate Schools of Letters, Nagoya University.
- Tversky, A. (1969) “Intransitivity of Preferences” *Psychological Review* 76: 31-48.
- Tversky, A. and D. Kahneman (1986) “Rational Choice and the Framing of Decisions.” *The Journal of Business* 59(4), part 2: 251-278.
- Tversky, A., D. Slovic, and D. Kahneman (1990) “The Causes of Preference Reversal.” *American Economic Review* 80: 204-217.
- Van Deemter, Kees (2009) *Not Exactly: In Praise of Vagueness*. Oxford University Press.
- 池上直己、下妻晃二郎、福原俊一、池田俊也 編 (2001) 『臨床のためのQOL評価ハンドブック』 医学書院。
- 大石繁宏 (2009) 『幸せを科学する—心理学からわかったこと』 新曜社。
- 鈴木真 (2000) 「J. S. Millにおける二つの快樂の質の概念と価値の快樂説」『倫理学研究』, 第30号, 関西倫理学会, 33-44.
- 鈴木真 (2011) 「帰結主義の必要条件とその根拠」『倫理学研究』, 第41号, 関西倫理学会, 125-136.
- 鈴木真 (2014) 「「幸福とは何か」という哲学的問を問い直して、規範的探究にとっての幸福の理論を構築する」『中部哲学会年報』, 第45号, 中部哲学会, 13-34.
- 高野陽太郎 (2000) 「因果関係を推定する—無作為配分と統計的検定」(佐伯胖、松原望編 『実践としての統計学』 東京大学出版会の第3章).
- 中村元 訳 (1984) 『ブッダのことは—スッタニパータ』 岩波文庫。